

有坂秀世『音韻論』の増補版について

吉池孝一

一

有坂秀世『音韻論』(三省堂)は、昭和15年に初版が発行され、その後版を重ねた。

- ①『音韻論』昭和15年12月15日発行。印刷者：三省堂蒲田工場。
- ②『音韻論』昭和17年1月15日再版発行。印刷者：三省堂蒲田工場。
- ③『音韻論』昭和18年12月10日三版発行。印刷者：三省堂蒲田工場。
- ④『音韻論』昭和22年9月30日初版発行。印刷者：清和印刷株式会社。
- ⑤『音韻論 増補版』昭和34年5月5日初版発行。印刷者：萩原印刷所。
- ⑥『音韻論 増補版』昭和44年9月20日4版発行。印刷者：不記。
- ⑦(復刻版)『音韻論 増補版』1992年11月25日復刊第1刷発行。印刷者：不記。

『音韻論』は、①初版②再版③三版までは同一の紙型により誤植が訂正された。その後紙型が失われたため、新たに版を組み直して④戦後初版が上梓され、この時に大量の新たな誤植が生じた。有坂氏の死後、④戦後初版の紙型に基づきその誤植に訂正を加えて⑤『音韻論 増補版』が発行された。その後、平成4年に、⑤『音韻論 増補版』に基づき、⑦(復刻版)『音韻論 増補版』が復刻刊行された。

かつて、『KOTONOHA』52号で<sup>1</sup>、⑤『音韻論 増補版』で訂正され得なかった誤植を幾つか紹介するとともに、③『音韻論』が最も完成されたかたちの有坂秀世著『音韻論』であることを述べた。本稿では、⑤『音韻論 増補版』において為された校訂の中に、旧版の誤に復してしまった例があること、及び編集者が意を持って校訂した中に有坂氏の意図とは異なる部分があることについて述べてみたい。

二

昭和34年発行の⑤『音韻論 増補版』の校訂作業において、誤が生じた例を6つ挙げると以下のとおりである。

1. 「インドの地名 Gudzrati をその地の人の発音するのを聴くと、ドイツ人の耳には gu- $\bar{d}$ ʒə-ra:-ti の如く四音節に聞えるのであるが、発音者自身は (gu- $\bar{d}$ ʒra:-ti) の三音節を意圖してゐるのである。」(⑦復刊本108頁3-6行)

---

<sup>1</sup> 吉池孝一 2007:15-19.

ここで問題となる部分は「ドイツ人の耳には gu- $\overline{d_3}$ a-ra:-ti の如く」の「 $\overline{d_3}$ a」である<sup>2</sup>。諸版本をみると、①②③④「 $d_3$ 」→⑤⑥⑦「 $\overline{d_3}$ 」とある。⑤「増補版」の編集者は意をもって  $d_3$  を  $\overline{d_3}$  と校訂したけれど、これは  $d_3$  が正しい。有坂氏は、破擦音の表記にあって、音声及びそれに準ずる表記の場合、破裂成分と摩擦成分を結ぶ結合記号 $\frown$ を用いない。結合記号 $\frown$ を用いるのは音韻表記の場合のみである。それは「 $\frown$ ( $\overline{t}$ ʃild-) を [ $\overline{t}$ ʃild-] と発音する」(⑦復刊本 170 頁 6 行) などからも伺える。これは、有坂秀世『音韻論』の一貫した態度である。したがって、括弧〔 〕こそ付されていないけれど、音声表記に準ずる前者は gu- $\overline{d_3}$ a-ra:-ti であり、音韻表記の后者は  $\frown$ (gu- $\overline{d_3}$ ra:-ti) でなければならない。この部分は、①②③④○「 $d_3$ 」→⑤⑥⑦×「 $\overline{d_3}$ 」ということになる。

2. 「フランス語に於ては、語の切れ目は音節の切れ目とは無関係である。例へば Nou|s a|vons| de|s a|mi. 」(⑦復刊本 117 頁 14-16 行)

縦線|は音節の切れ目を示す。いうまでもなく、これはリエゾンによって語の切れ目と音節の切れ目が異なってくる例を挙げた箇所であるが、問題となる部分はリエゾンとは関係がない。「de|s a|mi」の単語の語形が問題となる。諸版本をみると、①②「de|s a|mi」→③④「de|s a|mis」→⑤⑥⑦「de|s a|mi」とある。des により複数形であることがわかるから、もちろん③④の amis が正しい。したがってこの部分は、①②×「de|s a|mi」→③④○「de|s a|mis」→⑤⑥⑦×「de|s a|mi」ということになる。

3. 「古代ギリシア語に於て、語の末尾に立ち得る子音音韻は  $\nu, \rho, \varsigma$  の三種だけであつた。然るに  $\epsilon\kappa, \omicron\upsilon\kappa, (\omicron\upsilon\chi)$  の両形が  $\kappa(\chi)$  で終つてゐることは、それらが Enklisis である事實と共に、この両形が独立の「音韻論的語」を成してゐなかつたことを示すものである。」(⑦復刊本 117 頁 25 行-118 頁 3 行。\*技術的な問題でギリシア文字を正しく表記し得なかつた。すなわち  $\epsilon, \upsilon$  の上に ' を付す。次の説明文においても同様である。)

問題となる部分は用語の Enklisis である。諸版本をみると、①②「Enklisis」→③④「Proklisis」→⑤⑥⑦「Enklisis」とある。ここは、 $\epsilon\kappa, \omicron\upsilon\kappa, (\omicron\upsilon\chi)$  の両形が  $\kappa(\chi)$  で終わっているからには、{ $\epsilon\kappa, \omicron\upsilon\kappa, (\omicron\upsilon\chi)$ +他の語}によって 1 単位（音韻論的語）を成すものであり、けっして{他の語+ $\epsilon\kappa, \omicron\upsilon\kappa, (\omicron\upsilon\chi)$ }で 1 単位（音韻論的語）を成すものではないということを述べた箇所である。このような、 $\epsilon\kappa, \omicron\upsilon\kappa, (\omicron\upsilon\chi)$  と他の語との関係を示す用語

<sup>2</sup> この部分には論旨に直接係らない問題がある。それは「-ti」の問題で、諸版本をみると、①②③は「ti」とするけれど、④⑤⑥⑦はハイフンを付して「-ti」とする。これは③までの誤を④戦後初版で改めたものである。したがって①②③×「ti」→④⑤⑥⑦○「-ti」である。

として、ドイツ語の Enklisis (前接) がよいか、それとも Proklisis (後接) がよいかという問題である。Enklisis (前接) は  $\epsilon\kappa, \omicron\upsilon\kappa, (\omicron\upsilon\chi)$  が前の語に接して 1 単位を成す、即ち語末となることを示し、Proklisis (後接) は  $\epsilon\kappa, \omicron\upsilon\kappa, (\omicron\upsilon\chi)$  が後に続く語に接して 1 単位を成す即ち語末ではないことを示すから、ここは Proklisis (後接) が正しい<sup>3</sup>。したがってこの部分は、①②×「Enklisis」→③④○「Proklisis」→⑤⑥⑦×「Enklisis」ということになる。

4. 「例へば, Guten Morgen ! (  $gu:t\grave{a}n \ m\ddot{o}rg\grave{a}n$  ) は [  $gum\ddot{o}i\ddot{n}$  ] 或は [  $gum\ddot{o}$  ] と發音すれば充分分るし, . . . 」(⑦復刊本 166 頁 2-3 行)

問題となる部分はドイツ語音韻表記の (  $m\ddot{o}rg\grave{a}n$  ) である。諸版本をみると、①②③④「(  $m\ddot{o}rj\grave{a}n$  )」→⑤⑥⑦「(  $m\ddot{o}rg\grave{a}n$  )」とある。Morgen の g に相当する音韻表記を前者は接近音 (  $j$  ) とし、後者は破裂音 (  $g$  ) とする。⑤「増補版」の編集者は意をもって破裂音 (  $g$  ) に訂正したわけであるが、これはかえって有坂氏の意に反する。

確かに手書きの j と g は似ている。これによって誤植が誘発されたとみなしたのであろうが、Guten Morgen の音韻表記を (  $gu:t\grave{a}n \ m\ddot{o}rj\grave{a}n$  ) のように接近音 (  $j$  ) で表記することは昭和 15 年の『音韻論』が初出ではない。昭和 10 年の「有坂秀吉氏音韻論手簡」に二箇所 (  $gu:t\grave{a}n \ m\ddot{o}rj\grave{a}n$  ) とあり<sup>4</sup>、昭和 11 年の「音韻変變化について (三)」にも「例へば、(  $gu:t\grave{a}n \ m\ddot{o}rj\grave{a}n$  ) は [  $gum\ddot{o}i\ddot{n}$  ] 或は [  $gum\ddot{o}$  ] と發音すれば充分分るし, . . . 」とある<sup>5</sup>。このことからみて、接近音 (  $j$  ) をただちに誤植とするわけにはいかない。

この点につき、内藤好文 1966 によると<sup>6</sup>、北ドイツおよび中部ドイツで、語内の g [  $g$  ] は [  $a$ ] [  $o$ ] [  $\text{ɔ}$ ] [  $u$ ] 以外の音の次で [  $j$  ] に發音されるという。例えば、Siege [  $zi:j\grave{e}$  ]、Berge [  $b\ddot{e}rj\grave{e}$  ]、Metzger [  $m\ddot{e}tsj\grave{e}$  ] など。このような發音は、昔は標準的と考えられ、今で

<sup>3</sup> 田中美知太郎・松平千秋 1970 (第 1 刷發行は 1951 年) によると次のようにある。

「§ 28. 若干の単音節語はそれ自身アクセントをもたず、次に続く語に添えて軽く發音される。これを前倚辭 (*proclitic*) という. . . 略. . . .」

§ 29. またある種の語は、本来はアクセントを持っているのであるが、実際に文(または句)中に用いられる時には、これに先行する語に添えて發音され、自己のアクセントを失ってしまう。このような語を後倚辭 (*enclitic*) と稱する. . . 略. . . .」(9 頁)

田中美知太郎・松平千秋 1970 は、Proklisis (後接) に相当する *proclitic* を前倚辭と稱し、Enklisis (前接) に相当する *enclitic* を後倚辭と稱する。ドイツ語に於ける一般的な訳語と当該書の訳語とでは、「前」「後」の用い方が逆になっている。これは、この種の訳語において「前」「後」いずれを用いるか、とかく出入りがあったことを示すものであろう。あるいはこのような訳語上の問題も誤記誤植が生ずる契機の一つとなっていたかもしれない。

<sup>4</sup> 有坂愛彦・慶谷壽信編 1989:297-320 の「有坂秀吉氏音韻論手簡」による。同 314 頁、316 頁参照。

<sup>5</sup> 有坂秀世 1936:46-56 の p.55 による。なおここで挙げた例文のなかには、本論と関わらない部分であるが、明らかな誤記誤植が 2 カ所ある。煩瑣となるため明示せず正して提示した。

<sup>6</sup> 内藤好文 1966 の 69 頁による。なおこれは第 3 版であり、初版は 1958 年發行。

も相当行われているけれども、学校教育によって[g]に置き換えられつつあるという。この記述によれば〔mørjən〕という音韻をもったドイツ人がいてもなんら不思議ではない。〔j〕を誤記として処理してしまうわけにはいかないのである。これよりこの部分は、①②③④○「〔mørjən〕」→⑤⑥⑦×「〔mørgeŋ〕」とする。

5. 「近代ギリシャ語では、古代ギリシャ語の二重母音 au(αυ),eu(ευ)は、av, ev の音に變化してゐる。例えば・・・・, dulevo(δουλεύω)の如し。」(⑦復刊本 257 頁 8-10 行)

問題となる部分は「dulevo(δουλεύω)」の「d」である。諸版本をみると、①「dulevo」→②③④「**ḍ**ulevo」→⑤⑥⑦「dulevo」とある。δ は古典ギリシャ語で破裂音[d]として発音され、近代ギリシャ語では歯間摩擦音[ð]として発音される<sup>7</sup>。ここはもちろん d に横線を付し[ð]であることを表わした **ḍ** が正しい。したがってこの部分は、①×「dulevo」→②③④○「**ḍ**ulevo」→⑤⑥⑦×「dulevo」ということになる。

6. 「その語自体の」(⑦復刊本 266 頁 18 行)

問題となる部分は「自体」の「体」の字体である。①②③④○「體」→⑤⑥⑦×「体」となる。これは単純な誤である。

### 三

増補版において旧版の誤に復してしまった例を再度示すと次のようである。

2. ①②×「de|s a|mi」→③④○「de|s a|mis」→⑤⑥⑦×「de|s a|mi」

3. ①②×「Enklisis」→③④○「Proklisis」→⑤⑥⑦×「Enklisis」

5. ①×「dulevo」→②③④○「**ḍ**ulevo」→⑤⑥⑦×「dulevo」

正○と誤×の変遷がまことに興味深い。旧版①②の誤を正し③三版となり、④戦後初版もそれに倣った。ここまでは通常の校訂の流れであるが、ここからがいけなかった。④戦後初版では、③三版までの紙型が失われたため新たに版を組み直し、多くの誤植が生じた。その後、⑤増補版は、誤植の多い④の紙型を利用し、その誤植を正して刊行された。誤植の訂正作業において、最良の③三版を利用せずに①初版を利用して機械的に事を進めた部分があるとみえ、④の正しい形までも、旧版①②の誤に復してしまったというわけである。

次に、編集者が意を持って校訂したものを再度示すと次のようである。

1. ①②③④○「**ḍ**₃」→⑤⑥⑦×「**ḍ**₃」

4. ①②③④○「〔mørjən〕」→⑤⑥⑦×「〔mørgeŋ〕」

<sup>7</sup> 松本克己 1971 「ギリシア語」(pp.1401-1408)「近代ギリシア語」(pp.1424-1427)参照。

6. ①②③④○「體」→⑤⑥⑦×「体」

6は単純な誤であるが、1と4は有坂氏の意図とは異なる校訂であると言わざるを得ない。そのことについては先に述べたとおりである。

〈参考文献〉

有坂愛彦・慶谷壽信編 1989.『有坂秀世 言語学国語学 著述拾遺』,東京:三省堂。

有坂秀世 1936.「音韻變化について (三)」,『コトバ』第6巻第1号:46-56頁。

田中美知太郎・松平千秋 1970.『ギリシア語入門 改訂版』,東京:岩波書店。なお第1刷発行は1951年。

内藤好文 1966.『ドイツ語音声学序説』,東京:大学書林。なおこれは第三版で、初版は1958年発行。

松本克己 1971.「ギリシア語」(pp.1401-1408)「近代ギリシア語」(pp.1424-1427),『言語学大辞典第1巻世界言語編(上)』,東京:三省堂。

吉池孝一 2007.「有坂秀世『音韻論』の諸版本」,『KOTONOHA』52:15-19頁。